

# 遺品写真から検証する富本憲吉再考Ⅱ：安堵時代Ⅰ

## —富本憲吉・一枝夫妻のモダンな暮らしと安堵を訪ねた人々—

森 谷 美 保

前号に続き、近代陶芸界の巨匠富本憲吉（1886-1963）が遺した写真約1400枚のうち、大正時代の約300枚に焦点を当て、未公開の写真を紹介する。

最初に、留学から帰国したのちの富本の動向を簡単に記しておこう。

1908（明治41）年12月、イギリスに渡り留学時代を過ごした富本は、1910（明治43）年6月15日に神戸港へ到着した。奈良県安堵村の実家に戻ったのち、間もなく上京。帰国する船の中で知り合った画家を介して、終生の友となるバーナード・リーチと出会う。同年9月に南薫造とともに新宿で下宿して、自刻自摺の木版画制作などを始め、翌1911（明治44）年初めには、清水組（現・清水建設）で建築の仕事に携わる。その後3月には退職し、この間に遊びで始めた楽焼に夢中になり、徐々に美術、工芸品制作への興味を強めていく。同年4月には雑誌『美術新報』が主催する「新進作家小品展覧会」に水彩画や楽焼、木版画などを出品し、リーチとともに展覧会場の室内装飾も担当して、富本デザインによる椅子が制作された。

展覧会終了後には、安堵村の実家に戻り、自宅にアトリエを構えて、木版画、染織、刺繍、革細工などの工芸品作りに熱中し、白樺主催の展覧会などにそれらを出品したり、美術雑誌に文章を発表する日々を過ごしていた。そんな富本のもとへ、1912（明治45）年2月、未来の妻となる尾竹一枝が訪ねて来た。

尾竹一枝（1893-1966）は日本画家・尾竹越堂の長女で、女性雑誌『青鞥』で「紅吉」の名で活動する「新しい女」と称された当時19歳の女性であった。富本は最初の出会いのときから一枝に惹かれたようだが、ふたりがただちに恋愛関係へと発展することはなかった。その後まもなく一枝は、当時としてはあまりにも大胆であった言動が問題となって、青鞥社を退社せざるを得なくなった。そして、新たな文芸雑誌『<sup>さくらん</sup>番紅花』（1914年3月創刊）を発行することとなり、約1年前に知り合った新進の美術家・富本憲吉にその表紙画を依頼する。これがきっかけとなり、彼らは急速に親しくなって、同年10月27日に白瀧幾之助夫妻の仲人により結婚したのである。

結婚の翌年1915（大正4）年3月、夫妻は富本の実家がある安堵村に戻った。さまざまな工芸品作りから始まった富本の活動は、楽焼の面白さから本格的な陶芸制作を志すようになり、実家近くに本焼き用の窯と自宅の建築に取り掛かる。同年8月23日には長女陽が誕生し、年末に完成した新居へ移り住むと、富本夫妻の新たな暮らしが始まった。

以上が、安堵村で新婚生活を始めるまでの富本の動向である。安堵時代の写真には、夫妻が新居へと移り住んだ1915（大正4）年末頃から、東京・世田谷へ移転する1926（大正15）年までの

ものが記録されている。主に写されたのは、夫妻の安堵村での生活、自宅付近の景色、そこで作られた陶芸作品や窯場の様子、自宅他で開催した展覧会の会場風景、富本が模様を創作する上で発想の源となった村の風景や草花などである。

本時代の写真は数が多く、大半が初公開のものであるため、本号では夫妻の安堵村での生活や自宅付近の写真、村を訪ねた友人たちとのスナップなどを中心とし、陶芸作品や窯場、展覧会の様子、創作模様に関連した写真などは次号で紹介したい。

### 〈富本の安堵時代〉

富本の安堵時代の略年譜<sup>1</sup>は以下の通りである。

- 1915(大正4)年3月 安堵村に戻り、本焼き用の窯と自宅の建築を始める。  
8月23日 長女陽が生まれる。  
12月 自宅兼工房が完成。
- 1917(大正6)年6月 「富本憲吉氏夫妻陶器展覧会」(東京・神田流逸荘)を開催。  
11月8日 次女陶が生まれる。
- 1918(大正7)年6月 「富本憲吉夫妻陶器展」(東京・神田流逸荘)を開催。  
11月 「富本憲吉夫妻陶器及図案展覧会」(大阪・べにや美術店)を開催。
- 1919(大正8)年9月 赤絵の試作を始める。
- 1920(大正9)年12月 「富本憲吉陶器作品陳列会」(東京・資生堂ギャラリー)を開催。
- 1921(大正10)年5月 安堵村の生家で個展を開催。  
12月 「富本憲吉作陶展」(東京・野島康三郎)を開催。
- 1922(大正11)年4月 東京から教師を招き、子供のための富本家学校を作る<sup>2</sup>。  
9月 朝鮮へ渡り、約3週間滞在。  
12月 「富本憲吉製陶展」(東京・野島康三郎)を開催。
- 1923(大正12)年11月 「富本憲吉陶器展覧会」(大阪・内外木工所)を開催。
- 1924(大正13)年5月 「富本憲吉氏陶器展」(東京・野島康三郎)を開催。
- 1925(大正14)年5月 「富本憲吉近作陶器展覧会」(東京・野島康三郎)を開催。
- 1926(大正15)年10月 娘を開校予定の成城学園女学校に進学させるため、東京へ移住。

安堵村での富本の生活は、子供2人に恵まれて家族4人で暮らしながら、陶器作りに専念し、作品が完成すると生活のため展覧会を開いて収入を得るという日々であった。遺品写真からは、こうした富本家の日常の暮らし、彼らの家を訪ねた人々、初期の富本作品とそれを使って生活する家族の様子などが見て取れる。

富本は安堵村の自宅の様子をこう記している。

家は寝室、茶の間、台所、書斎とパーウィンド(筆者註：張り出し窓)の如き三畳の椅子ある室と、轆轤を置く四畳の工房と窯場と、全部耐火煉瓦を以てせられたる内方三尺余りの窯とを以てす。

井戸二つ（その一つは草花用として）、湯殿と便所と、五尺に足らぬ竹の柵を似て四圍をめぐらし、十坪の芝生と五六坪の草花を植へたる床と、木は小さき桃、葡萄、いちゞく、その他二三、近き人家は約一丁<sup>3</sup>。

富本はこのように、彼が理想とする家を建て、独自の生活スタイルを築くのだが、当時の安堵村は、近代化が進み始めた大正期とはいえ、家長を重んじる封建的な雰囲気根強く残る地域であった。日々の食事は、一家の主だけが畳の間に座り、他の家族は離れた板の間で食べるのが当たり前であったという<sup>4</sup>。そんな安堵村で、富本家では日当たりのよいベランダで家族一緒に食事をし、富本は人目をはばからず子育てに追われる夫人の家事を積極的に手伝うなど、当時としては極めて先進的な暮らしをする夫婦であった。こうした彼らの日常は、近隣の村民たちにとり、奇異を通り越して、危険な存在として映ったようだ。さらに、旧家の家長である富本が陶器作りをする様は、「殿様のひま仕事」<sup>5</sup>としか見えなかった。周囲のそうした空気を感じながらも、富本家では椅子を用いた洋風の暮らしをし、朝食にはパンを食べ、屋外に椅子を持ち出して紅茶を飲み、庭で薔薇や多くの草花を育てるといった生活を貫いたのである。

#### 〈安堵村での写真の内容〉

安堵時代の写真は、タイプが異なるアルバム2冊があり、アルバム①に72枚、アルバム②には98枚の写真が貼られていて、この他にバラの写真が100枚以上ある。

アルバム①〈写真1〉は留学時代と同じタイプのアルバムで、一枚目には富本の字で「け とみもと」、行を変えて「〇〇（判別不能）春四月」と記してある。写された写真の正確な年代は不明だが、幼い子供たちの様子からすると、1916（大正5）年から18（大正7）年頃のものと思われる。

またアルバム②〈写真2〉の1枚目には、「1919」と記されているので、同年のものが大半と考えられる。

2冊のアルバムは写した年が混在しており、さらに同じときに撮影された個別の写真が大量にあるので、種類ごとに整理して紹介し、判明、推定した年代は文中に記しておく。

#### 〈写真3～7〉自宅と工房

〈写真3〉は富本の自宅と工房を斜めからとらえた写真である。手前が工房で、その後ろに自宅住居の屋根が見える。〈写真4〉は工房を中心にとらえた写真で、窯用の煙突が見え、窯で火を使うため、隣家から離れた一軒家であることがよくわかる。周囲を田畑に囲まれ、富本が述べたように「竹の柵を以て四圍をめぐらし」、南側一面に庭が広がっていた。

〈写真5〉は工房の前で撮影された富本一家4人と母ふさを写した写真。幼い娘たちの様子から、1918（大正7）年頃と推測される。工房の窓の下には薪が置かれ、前庭には焼き上った陶器を乾燥させる棚が広がっている。そのとなりに別棟の住居が建っていて、向かって左手から出窓のある部屋〈写真6〉（富本がいう「パーウィンドの如き三畳の椅子ある室」であろうか）、次に玄関〈写真7〉、縁側のある和室（寝室または茶の間）と続き、南側一面に窓を配していた。玄関前には多くの草花が植えられ、明るい雰囲気の家であったことが見て取れる。

#### ＜写真8～11＞富本の生家と安堵村

＜写真8～11＞は安堵村の富本の生家と周辺を写した写真である。江戸時代の富本家は代々続く庄屋の家であった。当時の様子を伝えるように、生家の前は道に面して大きな門＜写真8＞と塀が巡らされていた。この場所は近年まで富本憲吉資料館があり、門前の様子は現在とそれほど変わっていない＜参考写真1＞。

＜写真9＞は、生家の庭の様子。この庭は富本が戦後生家に戻った時に使用した離れの座敷に面しており、現在でも同じ場所に灯籠と手水が置かれている＜参考写真2＞。

この他にも、生家の母屋や広い敷地内に置かれた納屋の写真＜写真10＞が数多くある。富本はこの納屋を制作のための作業場として一時期使用していたという。

写真の中には、安堵村とその近隣の風景や建物、農家の様子などを写した写真も多くある。それらの中でもさまざまな角度から何枚も写されたのが、安堵村の古刹極楽寺を撮影した写真＜写真11＞である。極楽寺は聖徳太子の時代から歴史を持つ寺とされ、富本の生家や自宅から目と鼻の先にあった。現在は再興されて建物も新しくなっているが＜参考写真3＞、当時は明治期の廃仏毀釈などにより無人の廃寺の状態であったようだ。入口には柵がされ、荒れ果てた雰囲気が伝わってくる。

#### ＜写真12～15＞書斎の室内装飾

＜写真12、13＞は当時の美術雑誌『美術』第1巻第6号（1917年4月）に掲載されているため、撮影時期は1917（大正6）年初め頃と特定出来る。雑誌の写真キャプションには「富本氏の書斎の一隅」と書かれているので、この部屋が富本の書斎であったのだろう。部屋の広さはそれほど大きくはなさそうだが、入口や本棚にカーテンを取り付けて、来客を通したときには目隠し出来る仕組みになっている。

＜写真12＞は長女陽を抱いた記念写真で、富本は瀟洒な洋風の服装でお洒落な室内履きを履いている。陽は家形の置物のようなものを手に持つが、これが富本自作の品かどうかは不明である。

＜写真13＞は人物のいない部屋全体を写した写真。壁には富本の自刻自摺版画「登科壺図」（参考図版1）が掛けられている。本棚には多くの洋書が並んでいるが、富本とリーチが読み耽ったとされる『Quaint Old English Pottery』（日本民藝館所蔵）を含め、これらの書名まで判別することは出来なかった。棚の上部には富本作のものと思われる陶器などが置かれ、入口の脇にはタペストリーのように「葡萄模様壁掛」（参考図版2）が掛けられており、その上部に配した棚にも壺や花器が見える。中央に置かれた折り畳み式のデッキチェアも、富本が制作したものかもしれない。

かつて富本は「室内の装飾、此れに配置すべき陶器織物その他のものに至る迄、此の取りとめなき一種不思議なる範囲に含まるゝ様に御座候」<sup>6</sup>と述べており、イギリス留学をきっかけに、室内装飾には並々ならぬ関心を抱いていた。この写真は雑誌に掲載されることを意識して、自身で制作した作品を中心に室内をレイアウトしたと考えられる。ヴァラエティに富んだ当時の富本の作品を知る上でも、興味深い写真といえるだろう。

＜写真14＞も同じ書斎で撮影された、新たに誕生した1917（大正6）年11月生まれの子女陶を



抱く一枝夫人とともに家族4人での記念写真である。年代は1917（大正6）年末頃であろう。1年前とは家具の配置などを変えたようで、一家の背後には富本の作品が並ぶ棚が見える。

家族の前に置かれた大きめの壺は「青磁大花生」である。本作は1918（大正7）年6月の『美術旬報』<sup>7</sup>に作品写真が掲載されており、同年6月に東京・神田流逸荘で開催された「富本憲吉夫妻陶器展」に出品された。家族写真の撮影時に、わざわざ最も目立つ場所にこれを置いたのは、この頃の富本にとり会心の作であったことが想像される。

また、壺が置かれた台は、富本家で「インドの椅子」と呼ばれてきた椅子<sup>8</sup>で、インド製かどうかは不明だが今も現存するもの。＜写真15＞は富本の生家と思われる室内で（写された女性は不明）、ここにも花を挿した花瓶を置いた「インドの椅子」が写る。その上にはエジプト風の複製画が掛けられており、これも富本が自ら飾りつけをした室内と考えられる。

#### ＜写真16～21＞自作したさまざまな椅子

＜写真16、17＞は書斎で写した安堵村に来訪した友人たちである。＜写真16＞で富本とともに写るのは、建築家の笹川慎一（1889-1937）。笹川は早稲田の理工科で佐藤功一（1878-1941）に学んでおり、佐藤は富本がイギリスに留学していたとき同じ下宿に住み、富本と親しく交流していた。おそらく佐藤を介して、笹川と富本は知り合ったと考えられる。安堵時代の写真の中で最もよく写る友人が笹川であり、頻繁にここを訪れたことが想像される。一枝夫人は笹川から薔薇の育て方を学び<sup>9</sup>、幼い富本の娘たちと一緒に写る写真が何枚も残っているため、家族ぐるみの親しい付き合いであったようだ<sup>10</sup>。

＜写真17＞も同じときに撮影したと考えられるが、笹川と一緒に写る人物は特定出来なかった。二人が腰かける籐製の椅子は、現存する富本自作の椅子（参考図版3）で、安堵時代の富本家で常用されたものである。

この他に、＜写真18＞にも籐製の椅子が写っているが、室内の右奥に置かれた椅子は1911（明治44）年の「美術新報主催 新進作家小品展覧会」で富本がデザインした展示室内の休憩用の椅子である（参考写真4）。これは「考案者は富本君で、又同君の盡力で寺尾家具店が矢張商売気なしに調整を引き受けて呉れたのである。（中略）富本君の図案ではあるが、皆注文した人は如何な椅子が出来るか少しもしらないで注文して呉れたのみならず、人出入りの多い会場に二週間も貸して置いて下すったのは誠に主催者にとって難有いことである。幸いにして出来揚った椅子は富本君の考案のよかったのと寺尾商店の監督が親切であったので意外の好評を博し其後に餘分の注文される向もあるのは甚だ喜ばしいことである」<sup>11</sup>と、展覧会場で人気を博し、注文販売された椅子であった。

また、おそらく＜写真18＞の部屋は玄関の隣に位置する南側の庭に面した場所と思われる。襖の形などを見ても明らかに日本間であるが、畳の上に種類違いの籐製の椅子を置いた、洒落た室内が演出されている。

＜写真19～20＞に写る富本夫妻が腰掛けるのはデッキチェアである。座面に布を貼った屋外でよく見かけるタイプの椅子で、室内だけでなく＜写真20＞のように庭でも頻繁に用いていた。さらに富本は、幼い娘たちのために小さなサイズの籐椅子も作っている＜写真21＞。この他にも、安堵を訪問した友人たちとともに、庭で椅子に腰かけて、語り合う写真が何枚も残されている。

### ＜写真22～25＞富本家の暮らし

＜写真22～25＞は富本家で用いられた花器、食器など、日常使いされた富本作品が写る写真である。一枝夫人は「私達は自分達の焼いた花器に、好きな花を入れる。その花が花器とぴったりに合ってくれた時、何よりもうれしい。これが本当に自分たちに恵まれたものだと思う」<sup>12</sup>と記している。ここに書かれているように、富本家の暮らしに花は欠かせないものであった。またこの他にも、「東京からカーネ이션拾本と洋蘭一種くる。すぐ植ゑてもらった」<sup>13</sup>という記述もあり、東京から花を取り寄せることもあったようだ。庭を写した多くの写真には植えられた草花が見え、＜写真22＞の右手には、富本作と思われる花器に可愛らしい洋花が大量に活けられていた様子が写る。

花器だけでなく、一家の日々の暮らしには富本自作の器が欠かせないものであった。＜写真23、24＞は食事の様子を写した写真。1918（大正7）年頃であろうか。富本作の椅子に腰かけた夫人と娘たちの前には、クロスが掛けられたテーブルが置かれている。食卓の上には富本の食器がずらりと並んでおり、ポットやカップ、平皿などがある。個々の器の判別はつかないものの、ソーサーのないマグカップ（参考図版4）や、＜写真24＞の幼い陶に食事を与える夫人の傍らには、高台が広く安定した子供用の食器（参考図版5）も見える。この頃富本は、「私は今年から出来得る限り安価な何人の手にも日常の生活に使用出来る工藝品をこさへたいと思ひ出しました」<sup>14</sup>と述べている。高価な鑑賞陶器ではなく、安価な日用食器を積極的に作り、それを世に広めたいと考えたのだ。これらの写真はこうした富本の考えを自宅の食卓で実践していることを伝える貴重な写真である。

食事をする彼女たちの背後には、襖の上に「登科壺図」（参考図版1）と、同じく自画自刻自摺版画の「更紗の一片」（参考図版6）<sup>15</sup>が掛けられ、さらに、さまざまな絵や書簡を貼り付けた屏風が立てられている。おそらくこれは、1913（大正2）年末に富本が制作したという屏風であろう。富本は友人の南薫造に宛て「目的はコンド製さえさした二枚折屏風のヒロウである。屏風は薫造、敬助、孝太郎、秀堂、バナード（又はバナ、の皮）諸先生の手紙に長原担（六歳）の壺年間草花（三十枚）を配し裏に自作野菊模様を雲母ずりとしたもの」<sup>16</sup>と手紙に記している。また本屏風を背景に、壺（富本作ではない）に草花を生けた写真も存在する＜写真25＞。

### ＜写真26～32＞富本と交流した人々

＜写真26～32＞は安堵村の富本家を訪ねた人々などである。

＜写真26＞は富本とリーチの陶器作りの師匠であった六世尾形乾山を写した写真。富本が後に発表した「六世乾山の思ひ出」<sup>17</sup>の中に、本写真が掲載されている。それによると「曾つて今より二十二三年前、即ち大正大震災の春、突然大和の私の家に現はれ、『法隆寺を参拝に来た』と訪問されたことがある」とある。富本家の庭のデッキチェアに座る姿で写された、六世乾山の姿を伝える貴重な写真といえるだろう。

＜写真27＞の右側の人物は美校出身の洋画家・安宅安五郎（1883-1960）である。安宅は一枝夫人の妹・福美と結婚しており、富本とは親戚関係にあった。左側の人物は不明だが、安宅の友人の美術家だったのかもしれない。安宅が写る写真は他にもあり、同様に妻の福美が一枝夫人と仲睦まじく語り合う写真が何枚も残されている。

＜写真28～30＞の人物は特定出来なかった。安堵村の富本家には富本と一枝夫人に近い多くの友人たちが訪ねているため、文献資料による人物調査は極めて難しい。今後の課題にしたいと思う。

＜写真31＞は富本のパトロンの一人であった山本顧弥太（左）（1886-1963）である。富本家で窯出し後の展覧会の折に訪れたのかもしれない。同じ日に撮影された一枝夫人と山本夫人の写真も存在する。

＜写真32＞は安堵の富本家ではなく、1917（大正6）年2月に和歌山県新宮の西村伊作（1884-1963）邸を富本夫妻と陽が訪ねたときの写真。向かって左に富本、右端に一枝夫人が立ち、地面に座り込んでいるのが陽である。富本の頭上に見える特徴的な屋根の庇が、当時の西村邸（新宮での3番目の自邸、1914年竣工）の庇部分と一致しており、この他にも同じときの数枚の写真が存在する。

以上が、安堵時代のアルバムなどから抜粋した、交流関係を示す写真、富本家の暮らしを伝える写真の概要である。

富本の文献資料を見ていると、この他にも多くの文化人がこの地を訪ね、また一枝夫人の友人たちが写る写真も数多くあるが、それぞれの人物の特定は出来なかった。2冊のアルバムに写真の詳細について記したようなコメントはなく、またバラの写真の裏面などにも人物の名前を記入したものはほとんどない。

その一方、富本の遺品写真とは別に、柳宗悦の手元に残る写真には、1917（大正6）年頃に安堵の富本家の書斎でリーチとともに写した写真がある<sup>18</sup>。この他にも同様の写真があったと考えられる。

以上のように、本稿では安堵時代の富本家の暮らし、自宅付近の様子、交流関係を示す写真を中心に紹介した。

東京美術学校で建築装飾を学び、イギリス留学でウィリアム・モリスの仕事に感化された富本は、生活空間のあり方、室内装飾に対して強い興味と鋭敏な感性を持っていた。一家の主となり、新居を築いた際には、自身が理想とする部屋作りをし、家具や生活環境に配慮した暮らしをしたいと願っていたに違いない。幸いなことに、伴侶となった一枝夫人も美的センスに優れた女性であったため、2人の子供に恵まれた安堵での暮らしは、富本にとり何よりも幸せな日々であっただろう。

そして富本は、この地で本格的に陶器を制作するようになると、高価な鑑賞陶器ではない安価な日常陶器制作への関心を強く抱き、それを食卓で使用して自身が考える理想の器、作品作りを始めたのである。これは、昭和戦前期に富本が地方の窯場で行った、量産品制作の端緒といえる。

次号では、この時代に作られた作品や窯場の様子、自宅で開催した展覧会の写真、また富本の創作模様に関連した写真を中心に紹介したい。

本稿は2012年度鹿島美術財団の助成による研究成果の一部である。

(註)

- 1 本稿で記した富本の動向は、山本茂雄、森谷美保、松原龍一編「富本憲吉年譜」『生誕120年記念 富本憲吉展』朝日新聞社、2006年を基にした。
- 2 富本夫妻は子供たちを村の学校には通わせなかった。
- 3 富本憲吉「工房にて 二」『美術』第1巻第3号、1917年1月 p.59。
- 4 富本一枝「私達の生活」『女性日本人』第1巻第2号、1920年10月 pp.50-60。一枝夫人は本文の中で「この土地ではまだ、家長萬能で、主人は畳の上で飯を喰ひ、あとの家族は板間で喰ふのださうな」と記している。
- 5 前掲註4。
- 6 富本憲吉「室内裝飾漫言（私記の一節）」『美術新報』第10巻第11号、1911年9月 p.23。
- 7 坂井犀水「二つの展覧会招待日」『美術旬報』1918年6月29日。
- 8 海藤隆吉氏のご教示による。
- 9 富本一枝「安堵村日記」『婦人之友』第5巻第6号、1921年6月、pp.157-168。
- 10 1934（昭和9）年、笹川は東京祖師谷の富本の自宅の増改築を手掛けている。
- 11 森田亀之輔「本誌主催新進作家小品展覧会 展覧会の設立に就いて」『美術新報』第10巻第7号、1911年5月、pp.3-9。
- 12 前掲註4。
- 13 前掲註9。
- 14 富本憲吉「工房より」『美術』第1巻第6号、1917年4月、p.30。
- 15 『藝美』1年2号（1914年6月）及び『富本憲吉模様集第一』（1915年）に収録。
- 16 『南薫造宛富本憲吉書簡』奈良県立美術館、1999年3月、pp.78-79。
- 17 富本憲吉「六世乾山の思ひ出」『美術・工藝』第9号、1942年12月、pp.68-71。
- 18 拙稿「柳宗悦、工芸への傾倒ーバーナード・リーチ、富本憲吉との交流の中で」『柳宗悦展』図録、2011年9月、pp.166-169。

本稿の執筆にあたり、富本憲吉の孫である海藤隆吉氏、富本憲吉資料館館長の山本茂雄氏に多くのご教示をいただきました。記して謝意を表します。





写真1 アルバム①

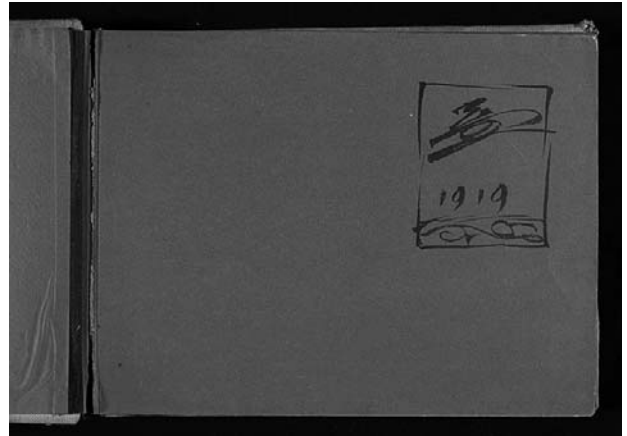


写真2 アルバム②



写真3 自宅と工房「つちや」



写真4 工房「つちや」



写真5 工房の前で富本一家と母ふさ 1918年頃



写真6 自宅と庭



写真7 自宅玄関前に立つ富本



写真8 生家前の門



参考写真1 富本憲吉資料館、門 2013年筆者撮影



写真9 生家の庭



参考写真2 富本憲吉資料館の庭 2013年筆者撮影



写真10 生家敷地内の納屋

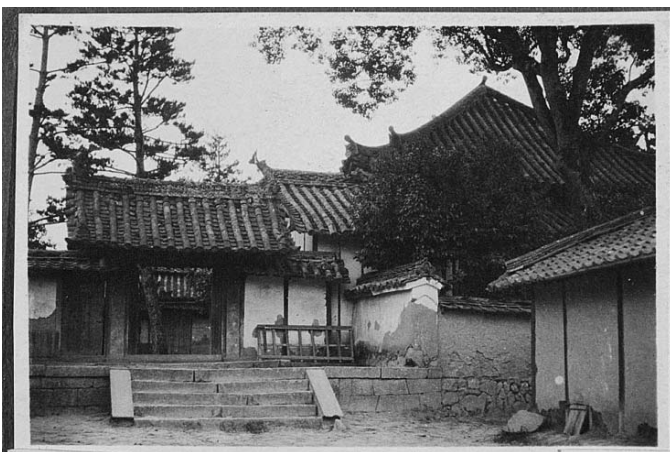


写真11 安堵村の極楽寺



参考写真3 現在の極楽寺





写真12 自宅書斎の富本と陽 1917年初め頃



写真13 自宅書斎 1917年初め頃



参考図版 1 登科壺図 1911年頃



写真14 自宅書斎での富本一家 1917年末頃



参考図版 2 葡萄模様壁掛 1912-16年



写真15 生家の室内



写真16 左：富本 右：笹川慎一



写真17 左：笹川 右：不明



参考図版3 籐の椅子、テーブル 大正期



写真18 自宅での富本



参考写真4  
「美術新報主催 新進作家小品展覧会」 1911年、『美術新報』第10巻第7号（1911年5月）より





写真19 自宅での富本



写真20 自宅庭での一枝夫人



写真21 自宅庭での陽



写真22 一枝夫人と陽

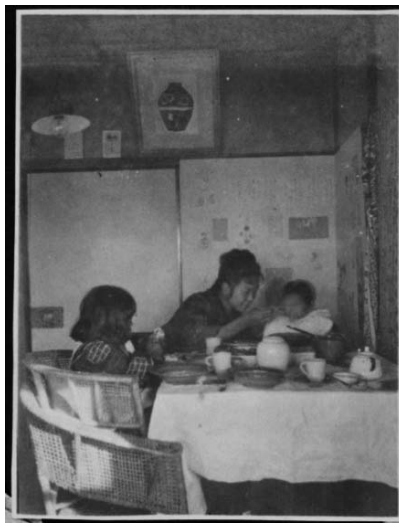


写真23 食卓風景



参考図版4 手付碗 1925年



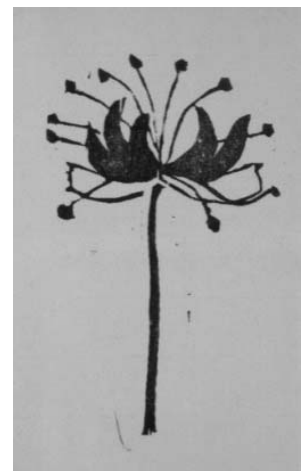
参考図版5 蓼模様染付飯茶碗 1919年



写真24 一枝夫人と陶



写真25 富本が装飾した衝立



参考図版6 更紗の一片 1914年

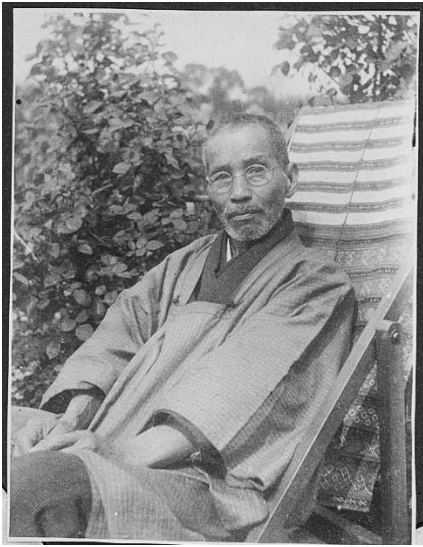


写真26 六世尾形乾山 1923年頃



写真27 左：不明 右：安宅安五郎

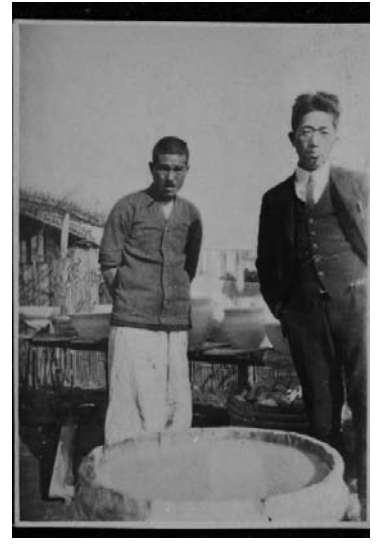


写真28 左：富本 右：不明



写真29 左：不明 右：富本



写真30 左端富本、他は不明



写真31 左：山本願弥太 右：富本



写真32 西村伊作郎にて 1917年